本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2006年8月15日 第13号

●発行元　人文ネットワーク
●印　刷　(株) 新栄堂　●編集制作　(株) 新評論編集部
●事務局　(株) 新評論編集部内（担当：吉住）
〒169-0051　東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391　Fax. 03-3202-5832
E-mail: yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実的プロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら――つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく――、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介させて頂くものです。

ベルナール・スティグレール／ガブリエル・メランベルジェ メランベルジェ眞紀 訳　『象徴の貧困　1. ハイパーインダストリアル時代』刊行にあたって

「哲学者」の闘い――われわれが「時代」をとり戻すために

❖特別寄稿　ガブリエル・メランベルジェ　*Gabriel Mehrenberger*

スティグレールとの出会い

J.-L.ナンシーの『世界の意味』(1993) という本の註に、新進気鋭の哲学者の注目すべき論文として紹介されていたのが『技術と時間 I』(1994単行本化) で、それがスティグレールとの最初の出会いである。きわめて難解なテキストで、その思想の射程はなかなか見通せなかったものの、自分に決定的な影響を与える本であることだけは確信し、以後ずっと読み続けてきた。

その後『技術と時間 III』(2001) の刊行のあと、スティグレールは突如、現代社会に直接言及するテキストを次々発表するようになる。これを得てようやく、一般読者も彼の思想への足掛かりを見つけ、その技術の存在論をみずからに関わる問題、時代の問題として読み始めるようになった。なにしろ90年代以降、インターネットや携帯といったテクノロジーが一般化し、ウェブという蜘蛛の糸が生活世界に張り巡らされ、ドゥルーズが予見していたコントロール社会が、今やわれわれの生のもっとも深奥にまで浸透しつつあるのだから。

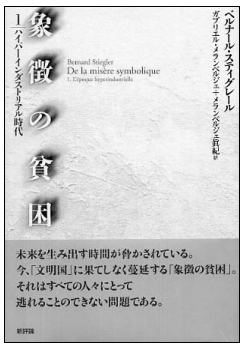
技術と時間

だが技術が人の在り方を変えてしまうという事態は何も今急に始まったことではない。人間は根源的に技術を持つ存在であり、言い換えれば、技術以前の人間の根源や本質といったものなどないのだ。技術はつねにすでに先行し、それが人間の営みを条件付け、社会や制度の変化を牽引してきた。ところが、現代の技術とはまず記憶や感覚、認知に関わる「精神のテクノロジー」であり、それが全てを計算化しひたすら利益を追求する資本主義経済と結びついたとき、人間はこれまでにない「生きづらさ」を覚えるようになった。

産業革命以後、過剰に大量生産される製品をさばくために要請された人間の新しい在り方が「消費者」である。20世紀には消費意欲をかき立てるために欲動をコントロールするマーケティングの手法が確立された。意識にごく自然に滑り込んでくる視聴覚メディアによって、消費者のうちには出来合いの自己像やライフスタイルが投影され、毎日同じ映像に晒され同じ情報を与えられる彼らは次第に同調性を高め、価値観や美的感覚そして記憶を共有するようになり、その結果ますます同じものを求めるようになっていく。しかし、このような「みんな」の条件反射としての未来予持からは、本来の意味での「未来」、つまり例外を呼び起こし迎え入れるような時間性は生まれてこないのだ。

象徴の貧困と哲学

模倣的に作られる欲望においては、求めるものや充足のかたちが見えているだけに、快感は初めから損なわれている。消費者としてしか生きられないというこの不快感を、今では誰もが感じているだろう。だがスティグレールは、この生きづらさ――技術の進歩の最先端に生じた途方もない「象徴の貧困」を個人の心理的問題としてではなく、根本的、普遍的な問いとして、つまり哲学の問題、「われわれの」問題として捉え直そうとするのだ。この「われわれ」とはイデオロギーを共有する親密な集団のことではない。ここで求められるのは、全く異なる「私」たちが互いの乗り越えがたい差異を組み合わせ、折り合いをつけながら、不調和のうちになんとか共生していくための知性の行使の主体である。そして逆説的だが、特異な「私」はこのような共同体の結節点にしか生じ得ないのである。ところが現行の産業技術のシステムは、目先の利益に直結しない欲望を――それこそが「われわれ」を、すなわち「文明」を築くために必要なのに――構造的に損なっていく。だからこそ今、テクノロジーとその社会的役割を徹底的に批判検証しなければならない。そしてこれは当然ながら政治の問題でもある。異質な者との対話の成立を信じ、同時に、対話が単なるおしゃべりに堕していないかをつねに懐疑するという二重の緊張感をともなった、共同生活への意志、政治的な「われわれ」つまりフィリア（友愛）を取り戻さねばならないのだ。(上智大学教員／現代思想・フランス語文体論)



新評論　2730円（税込）

シンボル（象徴）とは知的な生の成果（概念、思想、定理、知識）と感覚的な生の成果（芸術、熟練、風俗）の双方を指す。この象徴の力、意味を生み出す力が今、ハイパーインダストリアル社会の中で貧窮状態に追いやられている。本書はこの貧困との闘いをわれわれに宣言するものである。

著者 Bernard STIEGLER（1952-）デリダの指導で哲学博士号を取得した後、IRCAM（音響・音楽研究所）所長ほかの要職に就きフランスのメディア政策を主導、現在ポンピドゥー・センター文化開発ディレクター。主著『技術と時間』（現在3巻まで刊行）『愛・自己愛・友愛――九・一一から四・二一へ』『アクティング・アウト（現勢化）』『子供たちへの講演――人間の向上心について』『偶然から哲学をする』（いずれも邦訳予定／後者四書は新評論刊、仮題）。

「われわれ」の貧困と悲惨

座談会

2006年5月27日、早稲田大学大隈会館会議室で、『象徴の貧困』の訳者メランベルジェ夫妻を招いて第42回例会がおこなわれた。夫妻の報告はスティグレール哲学の全容から共訳の内実にまでおよび、それに触発された議論は多岐にわたるものとなった。参加者は桑田禮彰、土屋進、大野英士、李鳳新、入江公康、永田淳、田中伸一郎、白石嘉治。以下、発言要旨。（編集／白石）

サグラダ・ファミリアのように

ガブリエル・メランベルジェ　スティグレールの主著は『技術と時間』です。全5巻の構想で、現在3巻まで出ています。そこではプラトン以後の哲学を再検討し、自分の哲学を堂々と打ち出そうとしている。この主著とともに、『象徴の貧困』をはじめとした数多くの著作がある。彼はデカい哲学者であり、いつも工事中のサグラダ・ファミリア*の大伽藍のようです。〔*在バルセロナ、設計A. ガウディ。1882着工〕

その核心となっているのは、精神と肉体は別々のものではないという考えです。そこから「技術」の問題がでてくる。ここでいう「技術」とは、文字などもふくむ根本的なもので、それなしには、そもそも精神や肉体もありえない。スティグレールは精神の物質性を思考し、人間の新しい定義をこころみています。

だから『象徴の貧困』もたんなる時事的な評論として読むべきではありません。産業資本が文化を利用してマーケティングをやる。テレビで大量のイメージを垂れ流す。そのなかでわれわれは「時代」を見失う。これは「時代」を規定する「技術」との関係を見失うことであり、われわれは一種のパニック状態におちいり未来を思い描くことができない。その悲惨さが「象徴の貧困」と名づけられている。それは「ハイパーインダストリアル社会」への批判であると同時に、技術、あるいは精神や身体についての新たな思考をうながしています。

ふたりの翻訳をめぐって

メランベルジェ眞紀　工事中の大伽藍のようなスティグレール哲学の一端を訳出するわけですから、その全体とのかかわりのなかで翻訳することにこころをくだきました。具体的には、共訳者である夫とつねに議論をする。

フランス語の不明な箇所について話し合うだけではありません。むしろたいていの場合は、哲学的な解釈について、ああでもない、こうでもないと話し合う。といっても問題は相手を論破することではなく、ふたりがえんえんと議論するなかで、ある種の「接点」が結実して訳文が決まる。ふたりで訳すという以前に、ふたりで読むという状態があり、訳文の像が結ばれていったという感じです。

本書は哲学をやったことのないひとでも読めるようにこころがけました。とりわけ学生や大学院生たちに読んでほしい。彼らこそごく端的に「象徴の貧困」のなかにいる。モノと情報があふれながら、閉塞感のなかにいる。もちろん本書に解決策が書いてあるわけではありません。安易な解答に飛びつかず、じっくり本を読む。それが「象徴の貧困」にたいするひとつの抵抗であり、われわれの翻訳もそうしたものだったと思います。

デリダ以後の知覚の政治哲学

土屋　よく練られた訳文であり、今後、スティグレールを翻訳するさいに参照すべき水準を打ち出していると思う。たとえば Misère symbolique は「象徴的貧困」ではなく、やはり「象徴の貧困」と訳さなければならない。われわれの象徴をつくりだす力そのものの衰弱を問題にしているわけですから。本書がたんなるデリダ哲学のメディア論的な展開ではなく、知覚と政治の結びつきにまでおよんでいることをあらためて喚起しておきたい。

B. スティグレール

芸術とコントロール社会

白石　同時に注目すべきは、スティグレールが芸術を鼓舞していることだと思う。マーケティングによって情動が支配されているコントロール社会では、芸術こそがもっとも重要な抵抗の拠点となりうるのだ、と。

それは芸術が政治的になることではない。

『象徴の貧困』

時代 l'époque

土屋　進（中央大学他教員／現代思想）

私たちは政治が知覚に直接働きかける時代になっている事実から、どうも目を背けているようだ。

複製科学技術による芸術はアウラ（一回性、個別性）を喪失させた。実際、美術館でしか見ることのできない絵は、見る者の位置や光や周囲の環境の中で、固有の時間にのみ成立する固有の事物像を作り上げていたものだ。それは刻々と変化する知覚像だった。しかし写真や映画の映像は、どの角度にいても同一の普遍的な事物像を作り上げる。それが全体主義につながる文化的土壌であったと指摘したのはベンヤミンだった。

しかし現代では問題はさらに先鋭化している。事物像が認知されるには再認という作用が必要だ。固有の経験や履歴の沈殿物である記憶や意識がそのフレームとなる。そのフレームが異なる人々は固有な知覚像を認知している。しかしマーケティングを始めとする現代の科学技術は、この記憶や意識に直接働きかけ、同一フレームを固有身体の内部に作り上げるのだ。人々はまず視覚野から多様な光景をブラック・アウトさせ、静態的な仮想フレームを通して普遍的な同一像を直接知覚するようになる。

共同性とは、何より特異な者同士が象徴という共通のフレームを作り上げるプロセスのはずだった。だがそのプロセスを奪われた人々は「カミ」の視線が紡ぎ出す干からびた象徴を妄信し始めている。

政治 la politique

桑田禮彰（駒澤大学教員／哲学）

スティグレールは根深い政治的幻想、おそらくプラトン以来生き残り今日のハイパーインダストリアル時代に強化されグローバルに君臨するに至った幻想に、攻撃の照準を合わせる。「共同体の統一を課題とする政治が求める社会的紐帯は、構成員相互の文化的・感性的な類似・画一から生まれる」という幻想である。

この政治的幻想の核心は「社会的紐帯のためには各構成員の特異性 singularité（他と類似せず画一から毀れるところ）を排除し、自分と他人の特異性を発見する感性を画一化しなければならない」という発想に在る。すでに150年以上前トクヴィルはこの幻想を批判して「類似は孤立させる」と指摘していた。この批判の延長上にスティグレールは「感性の衰退は孤立させる」と指摘する。

今日明らかになっているのは、「当面の社会的紐帯確保のために感性の特異性を、将来の回復を約束して暫定的にのみ排除する」と称する政治戦略の欺瞞である。そうした戦略は、大量生産された商品の大量消費のための販路確保に貢献しても、そしてたとえ「個性的で多様な商品」として特異性の偽の代替物を提示する場合でも、社会的紐帯を不可能にするから感性の特異性の回復とは逆方向に進む。

感性の特異性尊重の政治こそ、社会的紐帯のための唯一最短の道である。

消費者 le consommateur

大野英士（早稲田大学他教員／文学）

スティグレールにあって、消費者に対置されるのは労働者ではない。芸術家である。

このところ、不気味な犯罪や暴力事件が立てつづけに発生して、そのたびにテレビをはじめメディアが大騒ぎを演じている。しかし現代日本社会は「不気味なもの」の跳梁に怯えながら、それを理解し表出する能力を決定的に失っているように見える。

ハイパーインダストリアル時代の「私」とはなによりも規格化され、プロファイル化された商品を消費する消費者にすぎない。そこでは「私」はおびただしい商品「情報」の氾濫のなかで、過去の記憶さえ失い、特異な存在、唯一の存在としての「私」を獲得することに失敗する。

特異化・個体化の可能性を奪われ、自分を愛せない「惨めな消費者」の言いしれぬ「生きにくさ」こそ、人々を動機のない犯罪や暴力へと駆りたてる原因ということなのだろうか？

相互理解や自己表現の欲求がないわけではない。しかし、「芸術」すらがどれだけ「売れるか」でのみ「評価」されるような風潮のなかで、多くの人間が「芸術」から悲劇的に疎外され、時代を超える特異性を生み出す持続した緊張を維持できずに、消費のサイクルの中に回収される。

本源的ナルシズムの失調を全面的に回避する手段はないにしろ、今こそ「不気味なもの」を象徴＝言葉へ、芸術へと連れ出さなければならない。

「感性的なものをあらたなかたちで、政治の問題との関係において問わなければならない」

（『象徴の貧困』第１章より）

芸術そのものがコントロールの支配にたいするコンフリクトを発生させる。その意味で芸術は政治的な闘いです。もはや文化を称揚するだけでは十分ではない。コントロール社会との闘いは、芸術と呼ばれてきた感性の水準での創造がもとめられているのだと思う。

永田　その意味で書店はまさに闘いの場です。いまは『ハリポタ』が大量に出まわっていますが、それを無視してやっている。この状況はけっこうキツイものです。スティグレールはそうした感覚を言い当ててくれている。

ただ、「象徴」の意味を誤解すると、文化の復権ということになりかねない。『国家の品格』などは、そういうものです。でも、スティグレールのいう「象徴」は感性の個体化とむすびついている。だからこそ芸術が問われているのでしょうし、そこには『ハリポタ』／『国家の品格』にたいする二重の闘いがあります。

「世界」と「地区（zone）」

大野　じっさいスティグレールは「世界」と「地区（zone）」という言い方をしている。コントロール社会では、われわれの感性は「地区」に押し込められて「世界」を感じることができなくなっている、と。

『ハリポタ』や『国家の品格』はまさに「世界」にたいする「地区」のルサンチマンのあらわれです。「象徴の貧困」という概念自体も、もともと 2002 年の大統領選挙で極右のルペンが決戦投票に残った事態を指し示しています。それは「地区」のルサンチマンに埋没し「世界」への感受性を失っているという意味で、日本の状況と通じるものがあります。

武器としての言葉

入江　本書には「世界／地区」以外にも、現在を言い当てる言葉がたくさんあります。たとえば「生きづらさ」「昆虫化」「ヴァンパイア化」「腹話術師」等々。エピグラフには、ドゥルーズの「あらたな武器を探すべきなのだ」という言葉が引かれていますが、まさに本書そのものが「武器」の宝庫ですね。

「象徴の貧困」とは、そうした武器のなかでももっとも鋭利なものです。状況はもはや「無残」としかいいようがない。しかも開き直る人間が多すぎる。「ぶっちゃけウザい」とか。それが全面化しているのが現状であり、本書は今日の技術への過信にたいする強力な解毒剤となるだけでなく、今を生きるために必要な言葉を与えてくれる哲学書です。

田中　「象徴の貧困」という言葉の必要性をつよく感じる。本書によって、この言葉が広まることだけでも意味があります。

入江さんの労働運動研究の貴重なところは、雇用条件が悪化することで、運動自体ができなくなる閉塞感に焦点を当てていることだと思う。その閉塞感のなかで、人間のいろいろな面が溶解していく。シニカルになるし、言葉も見失っていく。そうした状況を「象徴の貧困」と名指し、そこから考えていくことがなにより必要だと思う。

「象徴の貧困」と知識人の沈黙

桑田　翻訳のプロセスに興味があったが、編集者とのやりとりをふくめて、翻訳自体が重層的な対話であり、まさに「象徴」をめぐる闘いであることをあらためて認識した。

スティグレールのいう「象徴の貧困」とは、なにより感受性の問題であり、芸術家の闘いにかかわるものである。だが、同時に硬直した言葉にたいする批判でもある。その意味で彼は哲学者であり、悲惨な現状にたいする性急な解答をもとめることを慎まなければならない。とはいえ、本書には示唆に富む言葉がちりばめられており、とりわけ「恥」という概念には豊かなものがあると思う。すくなくとも、今日の状況において、知識人が沈黙することは「恥」である。臆することなく、実践としての議論と対話を重ねていくべきだろう。

座談会を終えて　スティグレールは「地区」に生きる「象徴の貧困」を語る。だが、それは高みからの同情でもなければ、告発でもない。彼が語るのは、彼が「そこからきた」からにほかならない。そしてその「エネルギー」も知っているからである。本書とともにはじまる闘いもまた、われわれ自身の「貧困」と「エネルギー」について語ることからはじまるだろう。（白石）

を　読　む　た　め　に

歌　le chant

出口雅敏（早稲田大学人間総合研究センター教員／文化人類学）

『ガッジョ・ディーロ』というフランス映画がある。主人公のパリの大学生は、亡き父が遺した録音テープのロマ（ジプシー）の歌に魅せられ、ルーマニアの村を訪ねる。彼らと暮らし、彼らの生活と共にある歌を覚え、ロマの少女と恋にも落ちる。だが帰国の日がせまり、彼は皆に別れを告げる。村を遠ざかる道すがら、父の録音テープを土に埋めるラストシーンが印象的だ。

ヨーロッパの民俗学は、民衆歌謡の収集から始まった。民衆歌謡のうちに、「民族の魂」をみたからだ。この学史は、批判的に語られがちだ。民俗学の原点が、近代ナショナリズムに重なるとされるからだ。だが歌謡が、資本やテクノロジーの論理のもとで大量生産・大量消費されるようになった現在、歌は「魂の表現」である、という視点は再考されていいはずだ。

歌謡とは本来、人びとの労働生活や余暇生活に埋め込まれていた「型」であり「リズム」であった。歌を歌ったり聴いたりすることは今日も別の形で、とりわけ私たちの内面的な感情生活において同様ではないか。歌は、自らの俗なる世界に聖性を付加したり、あるいは、もてあましていたり堰き止められていたりする思いや感情に型や流れを与える。そうして歌は体に棲みつき、離れることがない。歌と自分との関係について、ときには思いを凝らしていい。

恥　la vergogne

白石嘉治（上智大学他教員／文学）

今年３月、わが国の財政制度等審議会は2015年までに国公立大学の授業料を約 200 万円にするとの答申を出した。４年間で800万円。多くの学生は学費ローンを利用し、卒業後、たとえば月額８万円ずつ10年間返済することになる。

だが、ヨーロッパの大学はおおむね無償であり、約８割の米国の学生は学費が 40 万円ほどの国公立大学にかよう。またハーヴァードやスタンフォードなどの有名私立大学でも、今年の新学期（９月）から年収４万５千ドル未満の家庭出身者には授業料が全額免除されるという。そもそも大学の無償化は国際人権規約にさだめられたものである。

にもかかわらず、日本では学生をローン漬けにしながら大学教育がおこなわれようとしている。恥ずべき事態である。とりわけヨーロッパに留学した教員は無償にちかい学費の恩恵をうけたのではないか？　また同様のことは、70年代以前に日本で学生だった教員にもいえるのではないか？　スティグレールによれば、「恥」は固有の経験を前提とする。そして経済の支配は、われわれから固有の経験と恥を失わせる。沈黙すべきではないだろう。大学の現場で奪われようとしているのは、教員じしんの経験と恥への感受性にほかならないのだから。

生きづらさ　le mal-être

入江公康（文教大学他教員／社会学）

われわれは“おのずから”なにかを嫌うのではない。嫌う――それは自然な〈過程〉でなく、〈工程〉として存在する。なるほど、新しいモノは魅惑の対象であり、その登場とともに古いモノは嫌悪の対象となる。ぶざまで陳腐でそれは魅力がない。だから新しいモノの傍らに古いモノが置かれれば、人は“しぜんと”新しいモノに魅惑される。つい先頃まで最新だったモノが陳腐化する、腐朽する…。だが果たしてそうか。そうではなく〈われわれ〉は嫌悪させられているのだ。なにを？　古いモノを。いまあるものを。新しいモノが新しくあるのは、この目の前のモノを嫌悪することによってだとすれば…。

たゆむことなく嫌悪が生産され続ける。古いモノが古びるのはそれゆえこの〈工程〉によってであろう（「飽きる」？　効用の逓減というのはここから考える必要がある）。したがって――いやだからこそ――おそらく真に“古い”モノなどない。

スティグレールの話を突きつめるとどうやらそういうことになる。彼のいう〈生きづらさ〉はまずはここに根差す。嫌悪する存在としての〈われわれ〉――すぐにも奥行きのない〈みんな〉へと“堕し”、モノのみならず他の誰かを嫌悪し、そしておそらく、なによりもおのれを嫌悪する。この延長にあるのは“傲慢”だろう。おのれを嫌悪する者は、たぶん傲慢でしかありえない。「国民戦線」に投票した層に彼が見たのはこれだった。

現在、嫌悪はすぐれてインダストリアルでもあること、それを胆に銘じておく必要がありそうだ。そこでこそ〈友情〉なのだ。

ふたりで訳す

特別寄稿

共訳のあたらしいかたち……メランベルジェ眞紀

共訳というと大抵は、複数の訳者が本を分担して訳し、最後に誰かが監修するということを指すようだ。また共訳の作業に外国人が参加するとしても、多くの場合は日本人訳者が迷ったときにネイティブとしての意見を仰ぐ教示係として招かれるのがせいぜいらしい。協働といっても実際には時間的にこれで精一杯なのだろう。だが『象徴の貧困』の共訳という機会を与えられたわれわれは、一緒にいる時間には恵まれているので、ならばその時間を惜しまず本当に「二人で」訳そうと思い立った。スティグレールを踏まえて言えば、「われわれ」という共 - 訳者を作り上げてみようと思ったのである。

といってもその「われわれ」とは架空の（つまり象徴的な）主体であり、訳文そのものは日本人の私が書くのだが、原書の下読み、下訳、推敲という翻訳のあらゆる段階で、とにかく二人で何度も読み、何度も話し合った。最初のうちこそ日本人とフランス人という役割分担らしきものがあるのだが、ある時点を過ぎると、必ずしもフランス人の方が正確に読み、日本人の方が正確な訳語を見つけるというわけではなくなってくる。絶対に自分の方が正しいと思っているときでも、相手の解釈を聞いているうちにふとひらめいて、双方にとってより良いと思える訳が見つかることが多いのである（もっとも互いの外国語能力がある程度拮抗しているのが条件である。さもないとどちらかが屈服する）。

自分一人では言いたくても言えなかったことが、他者との関わりにおいてようやく言葉になる。これは共訳に限らず対話というものの醍醐味であろう。だが本当は一人で訳していようとも、書いている自分と読んでいる自分はたえず対話をしているのである。自分の複数の声の収集がつかなくなるから、書くという作業は厄介なのだ。だがそこに違った視点を持つ別の人間（共訳者や編集者）が絡んでくることで、ときには、一人では片付かなかった問題の糸口が見えてくることもある。勿論かえって問題が錯綜し決着できなくなったり、妙に納得し合って「二人の自己満足」に酔ってしまうという危険もある。だから対話はできるだけクールに、謙虚に進めなければならない。象徴の貧困との「闘い」だからといって、あまり熱くなってもいけない。

自己や「われわれ」の不一致や矛盾と向き合いながら、それらを調整し、向上の推進力とするという個体化のダイナミズムは、目下翻訳中の『愛・自己愛・友愛』（新評論近刊）にも通底しているスティグレール哲学の主要なテーマである。われわれは共訳という作業を通じ、そのテーマの実践を及ばずながら試みようとしているところである。（上智大学教員／哲学）

本を売る

『象徴の貧困』と書店で働くこと

本屋の抵抗

後藤祥子　ジュンク堂書店池袋本店

「金太郎飴書店」という言い方がある。どこを切っても同じ、つまりはこれと言って特徴のない品揃えの面白みのない本屋、という意味だ。そう言われてしまったら、もちろん本屋は反省しなければいけないのだが、私は果たして非があるのはこちら側ばかりなのだろうかと考えてしまう。少し売れる書き手がいれば、似たような本がこぞってあちこちから出版され、ベストセラーが出れば、関連本や二匹目のドジョウ的な本が恥ずかし気もなく量産される。いくらなんでも節操がない、と思うこともあるが、それでもある程度は売れるものだから、同じことが繰り返されていく。これって、スティグレールの言う「欲望の瓦解」につながるのではないかしら？

しかし、本屋の現場から、その流れに抗うことは可能なはずだ。たとえお客様が買いにきたのが二匹目のドジョウ本だったとしても、それ以外の本にも目が行くように、工夫することはできる。お客様と本の思いもよらない出会いを演出することが、「象徴の貧困」に対する本屋の抵抗なのである。

おすすめの３冊

■ 齋藤純一『**公共性**』（岩波書店　'00　¥1470）■ J.リッツァ／正岡寛司監訳『**マクドナルド化する社会**』（早稲田大学出版会　'99　¥3675）■ 浅見克彦『**消費・戯れ・権力**』（社会評論社　'02　¥2940）

行為としての読書

永田　淳　早稲田大学生協コーププラザブックセンター

書店の役割が変わってきています。すばやく柔軟に、求められている本を提案すること、それが全てになりつつあるのです。

行動する主体となることを求められるコントロール社会の中で、私たちは絶えずコミュニケーションさせられます。すぐに答えを求められ、休みなく考えを述べなければなりません。そのとき本に求められているのは、すばやく答えを与えること。確かにそのような本が売れ、書店もそれを推している。しかし、環境の変化に沿って主体を受動的に変化させたところで創造は起きません。象徴を創造する役割を手放しながら、書店は何も起こらない場所になりつつあるのです。

でも思えば、本を読むときはいつだって独りです。書店で本を開けば、コミュニケートに奔走させられることを中断させることができるし、独りならば本から実行指令（コマンド）を読み取らなければならないと思う必要なんてありません。このつかの間の孤独こそ、本が機能する「武器」となる時間なのですし、象徴を創りだすための条件なのです。ならば本を読む行為を信頼したい。それは書店にとって「生き残る」のではなく、「生きる」ための条件でもあると思うのです。

おすすめの３冊

■ M.フーコー／田村俶訳『**性の歴史Ⅲ　自己への配慮**』（新潮社　'87　¥3045）
■ C.フーリエ／巌谷國士訳『**四運動の理論（上・下）**』（現代思潮新社　'02　各¥2940）
■ B.チュミ／山形浩生訳『**建築と断絶**』（鹿島出版会　'96　¥3045）

＊表示価格は消費税（5%）込みの定価です

状況雑感

粗忽長屋もしくはハイパーリアリズム

蔵持不三也（早稲田大学教員／文化生態学）

落語には、単なる（ブラック・）ユーモアの域を越えて、現代の状況をものの見事に抉り出すグロテスクなリアリズムがしばしば仕掛けとして組み込まれている。たとえば故柳家小さんの十八番、『粗忽長屋』がそうである――。正体不明の行き倒れを見た粗忽な男が、本人を知っているといって急ぎ長屋に取って返し、やはり粗忽な「本人」を連れてきて行き倒れと対面させる。するとこの「本人」、行き倒れを見て自分だと嘆き、最後に、「自分に抱かれているこいつはたしかに俺なら、抱いている俺はいったい誰なんだ？」と自問する。はたしてそれからどうなるか、当然のことながらオチのあとにオチはない。だが、あの鏡像論すら想起させるすぐれて存在論的なこの話のもうひとつの面白さは、眼前に横たわる自分と先ほどまで長屋で安穏と寝ていた自分を、截然と切り離せない頼りない記憶の回路、つまり固体化の危うさにある。斃死という圧倒的な物語性や署名性の前では、匿名の日常性が足元からすくわれてしまう。そこでは「私」を支えてきたルーティンな示標性が他愛なく瓦解する。ときに自分を差異化する手段として、ときに社会に抗する原理としてあるはずのイマジネーション（個人的想像力）が、シンボル・システムとしてのイマジネール（社会的想像力）のうちに絡めとられてしまうという生存のメカニズム。個体化が衰退するハイパーインダストリアル社会とは、まさにこうしたメカニズムの極点にあるが、ありていにいえば、この社会こそ、われわれを住人とする「粗忽長屋」そのものではないのか。

編集後記▶出版とは Publication，公 - 社会的なものでなければならない。それは万人に開かれて書かれ、万人の手に届くよう作られ、提供され、読む人を豊かにするものでなければならない。そのように書かれず、作られず、提供されず、読む人を貧しくするものは出版とは言えない。少なくとも人文書は、そうした理想を追求する著訳者、出版・書店人によって牽引されなければならない。そして、読者をして“われわれの共有物”と言わしめるに足る「シンボル（象徴）」を、“出版”という行為の中に埋め込んでいかなければならない▶…ねばならない。そう、現実はその理想の感覚を失っている。それ故理想は常にこの現実への問いから始まる。何の為の出版か、誰の為の出版か▶『象徴の貧困』の著者と訳者は本書の作業を通じて、この理想の感覚を自明の感覚として昇華した。それは思想“界”や哲学“界”という閉じた場で闘わされる独善的な〈世直し議論〉を解放し、その核心部を日常世界の“真の格闘場”に生きるわれわれ当事者のもとに再提出する運動といえる▶真の格闘場に“出版”という「象徴の力」を復帰させること、これは、われわれ人文ネットの有志たちの本懐でもある。〔『象徴の貧困』編集者〕